

青年期の養育における親子認知の相違 — 級内相関と確証的因子分析 —

内海 緒香
(人間発達科学専攻)

問題

養育とは、社会の新規参入者に、その社会の文化、価値や規範を身に付けさせる社会化機能のひとつであり、子どもの発達や適応にとって重要な意味を持つ (Maccoby & Martin, 1983)。子どもは、思春期から青年期にかけ社会的視点取得が発達し自分と他者の関係内における相互性について理解するようになる。第3者的な視点の取得により、親の行動や態度に対して親自身の意図とは異なった子ども独自の受け止め方を行うかもしれない。これまで、青年期における養育を扱った研究は、親あるいは子どもの報告どちらかのみを用いることが多かった。社会化を親と子どもの相互作用を通じた過程と捉えるならば、親子双方の認識や見方を考慮することが必要 (Stice & Barrera, 1995) と考えられる。

報告者間の一致度

ある心理学的概念を測定する場合、異なった主体が行う評価や報告の一致度は、報告者間一致 (informant agreement: Tein, Roosa, & Michaels, 1994)、あるいは報告の収束 (Hartley, Zakriski, & Wright, 2011) または、かい離 (De Los Reyes & Kazdin, 2005) と呼ばれている。報告者間の一致度は、家族研究や子ども期青年期の臨床において重要な問題のひとつである。たとえば、子どもの心理的症状や重篤性の査定 (e.g. De Los Reyes & Kazdin, 2005)、青年期における物質使用 (McGillicuddy, Rychtarik, Morsheimer, & Burke-Storer, 2007) や慢性病を抱えた子どものウェルビーイング (Waters, Stewart-Brown, & Fitzpatrick, 2003) において親と子どもの報告は必ずしも同じではないと指摘されている。

親の養育行動や態度を測定する際に親子間で報告の不一致が生じることに関心を示す研究もある。これまで多くの研究が、親子の報告には低から中程度の関連性がみられ、養育に対する親子の認知はある程度重なってはいるが互いに異なる側面もあると指摘してきた (Pelegrina, Garcí

a-Linares, & Casanova, 2003; Schwarz, Barton-Henry, & Pruzinsky, 1985; Tein et al., 1994)。ところが、報告の差異におけるパターンを詳細に調べた場合、知見は一致していない。養育の側面別に見てみると、親報告の養護性や行動統制は子ども報告より高い (Guion, Mrug, & Windle, 2009; Noller, Seth-Smith, Bouma, & Schweitzer, 1992; Paulson & Sputa, 1996; Schwarz et al., 1985) という知見がある一方、情緒的側面では親子のレベルは変わらない (Pelegrina et al., 2003)、あるいは、情緒的側面や統制的側面にかかわらず子どもによる評定値のほうが高い (Tein et al., 1994) という結果もみられる。

報告者間評定の不一致は、測定誤差とバイアスという2つの要因に帰属しうる (Waters et al., 2003)。測定の信頼性という面を強調すれば、不一致の値はなるべく低いほうが望ましい。しかし、親子間評定の差異にはその違いを生んでいる親子関係の特徴や親子それぞれのパーソナリティや認知傾向など多くの要因が関わっている可能性も無視できない。これまでこうした養育概念に関する親子の差異を扱った研究は少なく、とくに日本ではほとんど研究がなされていない。したがって本研究では、養育をめぐる青年期の親子の一致性やその意義について検討を行う。

養育の構成要素

養育概念は1つの構成体というより多次元的な側面から成り立ち、主として情緒的支持的側面と規律的側面とに分かれる (Maccoby & Martin, 1983)。愛情、養護、共感のような肯定的感情を含む情緒的側面は、文化、性別、年齢や人種を超えて子どもの発達に必要な不可欠の要求 (Rohner, Khaleque, & Cournoyer, 2005) であり養育の根幹ともいべき特徴である。一方、子どもの行動や活動を監督し制御する養育者の行動や態度は統制と呼ばれ、青年期の社会化研究においてとりわけ関心のあるテーマ (Pettit, Laird, Dodge, Bates, & Criss, 2001) となっている。統制の中でも、子どもの行動に働きかける統制と心理状態に働きかける統制は子どもの適応と異なった結び付き

をされるといわれている (Barber, 1992)。Steinberg and Silk (2002) は、青年の自律の発達にそれぞれ異なった影響を与える養育のタイプとして、子どもの感情や考えを統制しようとする心理的統制と行動を統制しようとする行動的統制とを挙げ、両者は混同されるべきではないと述べている。

CRPBI Schaefer (1965) は、養育の情緒的支持的側面に加え青年期に重要な2つの統制に着目しCRPBI (Children's Report on Parent Behavior Inventory) を開発した。CRPBIは受容-拒否、確たる統制-緩い統制、心理的統制-心理的自律といった3つの養育次元を仮定し、子ども報告による養育の測定を目的としている。Schludermann & Schludermann (1988) は、この尺度の文化的差異を超えた適用を可能にするため、原版26尺度(260項目)から、社会文化的に不適切な項目および信頼性の低い項目を取り除きCRPBIの3次元構造を変更することなく18尺度(108項目)、さらに簡易版3尺度(30項目)へと短縮化を行った。CRPB-108および-30は青年期の養育を測定する尺度として、欧米だけではなく様々な社会文化において使用され続けている (e.g. McClure, Brennan, Hammen, & Le Brocque, 2001; Wu & Chao, 2005) もの、因子の再現性や下位尺度の信頼性については一致した結果が出ていない (Kawash & Clewes, 1988; Schwarz et al., 1985)。日本ではSchaefer版CRPBI-192項目による小嶋(1969)や鈴木・松田・永田・植村(1985)の研究があるが、CRPBI-108および-30を使用した研究はまだ行われていない。またこれまでのCRPBIの構造に関するほとんどの研究では探索的因子分析にとどまっておらず、確認的因子分析による分析は未だ行われていない。本研究では、第1に、CRPBI-108に含まれる複数の養育の下位尺度について、親子間の認識がどの程度一致するか、得点レベルに差がみられるか、父親と子ども、母親と子どものそれぞれのペアについて調べる。本研究では、先行研究に従い、親子間一致は低から中程度と仮定する。第2に、CRPBIにおける3つの養育概念が親子間で同じように認知されているかどうか、CRPBIの短縮縮版を用いて検討する。本研究では先行研究に従い、1つの情緒的側面と複数の統制的側面が弁別され、心理的統制と受容は負の関係性、行動統制と心理的統制とはほぼ無関連であると仮定する。

方法

対象者および調査時期と実施方法 東京都内の中学校に質問紙調査への協力を依頼し養育者(父母)が記入する質問紙2部と子どもが記入する質問紙1部および記入のための教示文のセットを全校生徒(396名)に配布してもらった。

教示文には匿名、自由意思による参加、回答したくない質問には答えなくてよいことを明記した。親子間のプライバシーに配慮し、質問紙はそれぞれ添え付けの封筒に入れてもらった。配布から回収までの期間は2008年11月から12月にかけての約2ヵ月間であり、115家庭(回収率29%)から回収された。分析に使用した対象者は、母親子ども対107組(母親平均年齢44.75歳、 $SD = 3.49$:中学生男子22.4%、1年生27.1%、2年生44.1%、3年生31.8%)、父親子ども対86組(父親平均年齢46.56歳、 $SD = 4.37$ 、中学生男子26.7%、1年生24.7%、2年生38.4%、3年生37.2%)であった。両親と子どもの3者から回答が得られたのは82組であった。

日本語訳の再検討 開発者であるSchludermann, E. H. に本研究の趣旨を伝えCRPBIの使用許可を得た後バックトランスレーションを行った。小嶋(1969)によるCRPBIの日本語訳を参照し該当する108項目について、翻訳業に携わる日本語と英語の堪能な帰国子女に日本語から英語に翻訳してもらった。次に原本の英語文と翻訳された英語文が意味のレベルで同等なものかどうか日本語に堪能なイギリス人留学生とSchludermann, E. H. に確認を依頼したところ、ほぼ問題がなかったため小嶋(1969)の訳文を採用した。

質問紙の構成 養育者には子どもに対する自らの養育態度を、子どもには父親と母親の養育についてCRPBI-108項目を尋ねた。養育者の性別に関し質問の順番を変えた2種類の質問紙をランダムに配布した。質問は全て、「よくあてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「全くあてはまらない」の4件法とした。

分析方法 CRPBI-108の18尺度、受容-拒否の次元:受容(8項目)、子ども中心(5項目)、肯定的関与(8項目)、個体化の受容(8項目)、所有(5項目)、敵意的無関心(8項目)、拒否(8項目)、確たる統制-緩い統制の次元:コントロール(5項目)、執行(5項目)、不執行(5項目)、緩いしつけ(5項目)、極端な自律(5項目)、心理的統制-心理的自律の次元:侵入性(5項目)、罪悪感によるコントロール(5項目)、敵意的コントロール(8項目)、一貫性に欠けたしつけ(5項目)、不安の吹き込み(5項目)、関係性の撤退(5項目)のそれぞれの項目に対し、父親、母親、子どもによる父親と母親の養育、計4種類の報告についてクロンバックの α 係数を求めた後、尺度構成に従い項目を足し合わせ項目数で割った。引き続き、任意の検者による一回の測定法ICC(2,1)により、父子対、母子対ごとに各尺度の級内相関係数(ICC)を求め、平均値の差の検定を行った。最後に、CRPBI-30を用い共分散構造分析により父子対、母子対ごとに確認的因子分析を行い、多母集団同時分析により親子認知の相違を検証した。パラメー

ター推定は最尤法で行っている。適合度指標は、 χ^2 値、CFI、RMSEA、AIC を用いた。CRPBI-108 の項目と 18 尺度名および -30 に相当する項目は附録にある。なお、欠損値は各変数 5% 以下であり系統的な発生が認められなかったため、期待値最大化アルゴリズム (expectation maximization) 推定で処理した。分析に使用した統計ソフトは IBM SPSS Statistics19 と Amos19 である。

結果

内的信頼性を確認するためクロンバックの α 係数を算出した (Table 1)。 α 係数の性質により 8 項目尺度に比べ 5 項目尺度のほうが α の値は小さい。母親の養育における“緩いしつけ”尺度を除き、母親の養育、父親の養育尺度双方で親報告 (.30 から .82) よりも子ども報告 (.50 から .91) の値は高かった。

親の報告と子ども報告の関連

それぞれの養育概念に対する親子報告の関連を調べたところ、ICC の値は母親の養育の場合、“一貫性に欠けたしつけ” (.01) を除き、中程度の関連 (.31 から .67) を示した (Juniper, O'Byrne, Guyatt, Ferrie, & King, 1999)。父親の養育は、母親の養育に比べ親子関連が弱かった (-.17 から .41) もの、統制のうちいくつかの尺度では母親と同程度の値を示した (Table 1)。

養育に対する認知レベルの差異

それぞれの尺度の平均値を求め、母親の養育における母親と子ども、父親の養育における父親と子どもの報告の間で t 検定を行った (Table 1)。母子対、父子対の平均値差をプロフィール化したところ、親子とも肯定的な養育の側面で中央値より高く、統制的否定的な養育の側面では中央値より低いという類似したパターンがみられた (Figure 1)。親子報告の差異を検討した結果、母親父親の養育両方で、子ども報告よりも親報告の方が“受容”、“肯定的関与”といった肯定的意味を示す尺度得点が高く、親報告よりも子ども報告のほうが緩い統制を意味する“不執行”および“極端な自律”得点が有意に高かった。父親の養育において、子ども報告に比べ親報告のほうが“コントロール”、“侵入性”、“罪悪感によるコントロール”、“不安の吹き込み”尺度の得点が高かった。18 尺度のうち“所有”のみ、方向性の異なる有意差がみられ、母親の養育において子ども報告のほうが値は高く、父親の養育において子ども報告のほうが低い値を示していた。

養育認知の因子構造と因子間の関連

因子の信頼性を検証するため、CRPBI-30 を用い父子対、母子対それぞれのモデルで確証的因子分析を行った。はじめに、受容-拒否、確たる統制-緩い統制、心理的統制-心理的自律に相当する 10 項目を測定変数とし、3 つの潜在変数によるモデルの適合性を母親の養育、父親の養育ご

Table 1. CRPBI-108 尺度ごとの α 、級内相関、平均値

尺度名	α		平均値 母 / 子	t 統計量	α		平均値 父 / 子	t 統計量
	母 / 子	ICC			父 / 子	ICC		
1 受容	.81 / .90	.59**	3.29 (.44) / 2.94 (.67)	4.51**	.80 / .89	.13	3.11 (.41) / 2.80 (.71)	3.36**
2 子ども中心	.68 / .86	.52**	2.93 (.49) / 2.87 (.73)	.76	.60 / .82	.29	2.77 (.47) / 2.67 (.72)	1.05
7 肯定的関与	.76 / .87	.67**	3.10 (.46) / 2.78 (.70)	3.90**	.81 / .85	.22	2.90 (.51) / 2.53 (.69)	3.97**
13 個体化の受容	.70 / .85	.46**	3.03 (.37) / 2.82 (.64)	.47	.74 / .86	.04	2.94 (.40) / 2.80 (.65)	1.74
3 所有	.51 / .64	.50**	2.19 (.41) / 2.33 (.60)	-1.97*	.60 / .69	.12	2.20 (.40) / 1.99 (.59)	2.69**
16 敵意的無関心	.71 / .89	.49**	1.56 (.38) / 1.66 (.62)	-1.45	.62 / .84	.13	1.76 (.36) / 1.85 (.64)	-1.15
4 拒否	.71 / .91	.42**	1.81 (.36) / 1.89 (.70)	-.99	.72 / .87	-.17	1.80 (.38) / 1.88 (.66)	-.98
5 コントロール	.48 / .58	.38**	2.40 (.39) / 2.37 (.53)	.35	.52 / .58	.36*	2.38 (.39) / 2.18 (.53)	2.78**
6 執行	.50 / .78	.46**	1.96 (.34) / 1.92 (.63)	.58	.47 / .80	.18	1.96 (.34) / 1.83 (.65)	1.61
12 不執行	.30 / .50	.53**	1.95 (.34) / 2.15 (.48)	-3.51**	.54 / .61	.41**	2.17 (.41) / 2.34 (.57)	-2.28**
14 緩いしつけ	.71 / .59	.56**	2.31 (.39) / 2.28 (.49)	.38	.65 / .64	.02	2.30 (.38) / 2.27 (.51)	.38
18 極端な自律	.67 / .82	.58**	1.79 (.49) / 2.14 (.69)	-4.32**	.61 / .77	.21	2.10 (.49) / 2.45 (.68)	-3.93**
8 侵入性	.63 / .77	.31*	2.34 (.45) / 2.31 (.65)	.52	.71 / .80	.41*	2.17 (.49) / 1.78 (.65)	4.43**
9 罪悪感によるコントロール	.65 / .68	.32*	2.17 (.47) / 2.11 (.58)	.71	.62 / .75	.32*	2.11 (.44) / 1.93 (.64)	2.26**
10 敵意的コントロール	.81 / .90	.55**	2.16 (.36) / 2.22 (.62)	-.95	.80 / .89	.24	2.14 (.41) / 2.02 (.63)	1.46
11 一貫性に欠けたしつけ	.76 / .80	.01	1.93 (.48) / 2.06 (.67)	-1.66	.74 / .74	-.06	2.05 (.50) / 2.03 (.66)	.13
15 不安の吹き込み	.48 / .76	.45**	2.52 (.44) / 2.51 (.69)	.17	.41 / .65	.05	2.40 (.36) / 2.23 (.61)	2.32**
17 関係性の撤退	.82 / .82	.54**	1.70 (.55) / 1.84 (.70)	-1.63	.80 / .88	.37*	1.72 (.41) / 1.73 (.74)	-.09

* $p < .05$, ** $p < .01$

とに確かめたところ、やや低めの適合性を示した（母親の養育（ $N = 214$ ）： $\chi^2(402) = 960.553, p < .01, CFI = .779, RMSEA = .081, AIC = 1086.553$ 、父親の養育（ $N = 172$ ）： $\chi^2(402) = 843.762, p < .01, CFI = .774, RMSEA = .080, AIC = 969.762$ ）。

確たる統制-緩い統制因子のうち、“緩い統制”に相当する項目（-.05 から -.51）の因子負荷の値が、“確たる統制”に相当する項目（.53 から .71）と比べ低いため、項目を逆転項目化せず、“確たる統制”（4項目）、“緩い統制”（6項目）および“受容”（10項目）と“心理的統制”（10項目）の4因子を仮定して再度分析を行った。3因子モデルと比べ、適合性指標が改善したため4因子モデルを採用した（母親の養育： $\chi^2(399) = 853.340, p < .01, CFI = .821, RMSEA = .073, AIC = 985.340$ 、父親の養育： $\chi^2(399) = 708.664, p < .01, CFI = .842, RMSEA = .067, AIC = 840.664$ ）。引き続き、母親父親の養育モデルごとに親子の多母集団同時分析を行ったところ、潜在変数間の共分散を制約したモデルに比べ、制約無しとしたモデルの適合性の

改善は有意であった（母親の養育： $\Delta\chi^2(36) = 102.369, p < .001$ 、父親の養育： $\Delta\chi^2(36) = 121.542, p < .001$ ）。Table2は、非制約モデルの適合指標および親子の4因子間相関である。両方のモデルで、“受容”は“心理的統制”および“確たる統制”と負の関連を示し、“緩い統制”とは正の関連を示した。一方、“確たる統制”は“心理的統制”と正の関連、“緩い統制”とは負の関連を示した。子どもは親に比べ、“受容”と“確たる統制”の結び付きをより否定的に捉え、“心理的統制”と“確たる統制”をほとんど同じ概念として見ていた。母親の養育モデルにおいてのみ、子どもは、“受容”と“心理的統制”の負の関連性をより強く認識していた。

考察

本研究では、CRPBI-108 およびその短縮版である CRPBI-30 を用い、母親と父親の養育における親子間報告の差異について多側面から検討した。下位尺度の内的信頼

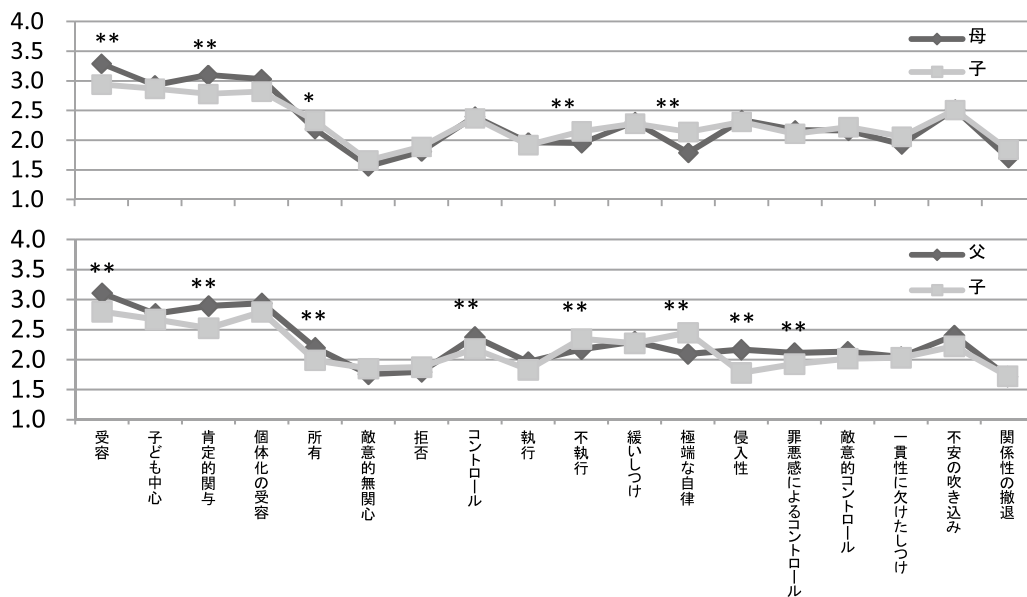


Figure 1. 18 尺度による母子対・父子対ごとのプロフィール
** $p < .01$, * $p < .05$

Table 2. 養育4因子の関連における親子認知の差異

	受容	心理的統制	緩い統制	確たる統制
受容		-.48/ -.55 (<i>n.s.</i>)	.23/ .47 (<i>n.s.</i>)	-.09/ -.57 (-2.78**)
心理的統制	-.52/ -.79 (3.01**)		.10/ -.49 (<i>n.s.</i>)	.34/ .97 (2.64**)
緩い統制	.16/ .59 (<i>n.s.</i>)	.07/ -.53 (<i>n.s.</i>)		-.51/ -.49 (<i>n.s.</i>)
確たる統制	-.43/ -.76 (-3.48**)	.74/ .93 (2.86**)	-.36/ -.54 (<i>n.s.</i>)	

上段は、父親の養育、下段は母親の養育、左側の値は親、右側の値は子ども報告である。カッコ内はz値と有意水準である。

** $p < .01$ (父親の養育： $\chi^2(798) = 1263.778, p < .01, CFI = .774, RMSEA = .059, AIC = 1527.778$,
母親の養育： $\chi^2(798) = 1392.298, p < .01, CFI = .783, RMSEA = .059, AIC = 1656.298$)

性は子ども報告のほうが値は高いものの親報告の値との間に大きな違いはみられなかった。母親の養育に関する親子間一致率は、先行研究 (Pelegrina et al., 2003; Schwarz et al., 1985; Tein et al., 1994) 同様、全般的に低から中程度の関連を示した。一方、父親の養育に関する親子報告の一致性は母親の養育に比べ相対的に低く、特に情緒的関係の側面についての親子関連が低かった。父親の養育と母親の養育をともに調べた研究は少ないが、どちらの養育についても親子間であまり差が見られないと報告されている (Caster, Inderbitzen, & Hope, 1999; Tein et al., 1994)。本研究のサンプルは女子に偏っていたことから性別ごとに親子報告の関連を調べたところ組織的な違いはみられなかった。したがって、父母の養育認知の一致率における差異は、父親より母親が主たる養育の担い手であるという養育における性役割の違いを反映したものと推測される。しかし、統制面のいくつかでは母親の養育に関する一致率と相違がなかったものもあり、父親の統制はある程度子どもと同じように認知されていたと考えられる。

本研究のプロフィール分析では、父親と母親双方の養育で同じようなパターンがみられた。すなわち、親の暖かさや肯定的な関係性を示す養育の値が高く、統制的側面は親子とも相対的に低いと認識しており、中学生の親子は優しく民主的な父母像を共有していたと示唆される。養育に対する親子間のレベルの違いでは、父親・母親ともに、親は子どもに比べ、より暖かく統制を行っていることを認知しており、本研究は先行研究 (Noller et al., 1992; Paulson & Spota, 1996; Schwarz et al., 1985) を裏付ける結果となった。しかし、統制のいくつかの概念で父親は自分の行動を子どもよりも高く見積もっているため、統制面における父親の養育に関する親子間バイアスは母親の養育に比べ強いと考えられる。このような親子の認知差に対する説明がいくつか考えられる。ひとつには、親は子どもに対し良い親役割を果たしたいと思う傾向があり、社会的に望ましい養育を反映した行動を過剰に見積もってしまう (Callan & Noller, 1986) ことがあげられる。父親がより高いレベルの統制を報告していた理由は、父親役割において情緒的支持的側面よりも統制のほうが高い価値を持つためと考えられる。2つ目の説明は、親が認識しているより、親はあまり暖かく無ければ統制面で厳しくもないと子どもが認知するのは、青年期に特徴的な感情的自律性の増大を反映している (Collins, 1991) というものだ。具体的な対象を2人の評定者が評定する場合と異なり、親が養育行動を自己評定する場合には親自身の主観が入りこむ余地は否めず、子どもはより独立した視点で親の養育行動を評価していたのかもしれない。

短縮版である CRPBI-30 により、因子構造の一致性を検

討したところ、どちらの養育についても3因子モデルより4因子モデルのほうが良い適合性を示し、親子間で因子の認識に顕著な違いが見られないという Schwarz et al. (1985) の結果と一致した。親子とも確たる統制と緩い統制は、1次元の両端というよりも別々の養育行動と捉えており、特に子どもは親以上に、確たる統制や心理的統制は受容と逆の強い関連性を示すと認知し、確たる統制と心理的統制はより類似した概念と認識していた。したがって、心理的統制は受容と逆の相関を持つという仮説は検証されたが、確たる統制と心理的統制は独立の概念であるという仮説は検証されなかった。本研究で確認された因子パターンは Kojima (1975) とほぼ同様の結果を示しており、親子とも確たる統制は情緒的暖かさとは負の関係性を持つと捉えていたことは日本において時代を経ても変化していない。それでは、確たる統制と暖かさの関連の強さに親子で差異がみられた理由は何故であろうか。確たる統制の内容妥当性について、親の統制の強さというより子どもの従いやすさを測定しているのではないかという議論が有る (Lewis, 1981)。自律性を希求し親とは異なったものの見方をするようになる青年期という発達段階では、心理的に侵入的な統制と同様に直接的な行動統制をより否定に認知したと解釈できる。本研究において、子どもが母親は自分に対し必要以上に干渉したがると感じ、母親以上に心理的統制を否定的に捉えていたという結果は、心理的統制は父親よりも母親に特徴的な統制パターンでありそれに対する子どもの心理的リアクタンスを反映していたと考えられる。もうひとつの説明は、養育に対する見方の発達的变化である。子どもは受容と緩い統制を肯定的な養育と認知し、心理的統制と確たる統制をほとんど同じ否定的な養育と捉えていたのに対し、親はこれら4つの養育を相対的に区別して認識していた。子ども側からすれば親からの強い制限や制約という意味を持つ確たる統制は、心理的統制と同じく専制や非民主性と解釈されていたといえよう。一方、成人である親は中学生の子どもに比べて認知的複雑性を持っていた可能性がある。親は養育に対し多面的な見方を有し、子どもを自由にさせておくことは必ずしも情緒的暖かさと同様に肯定的な態度ではなく、制限的に接することは必ずしも自律感を損なうような否定な意味を持つ統制だと考えていなかったのかもしれない。

本研究の限界と今後の課題について述べる。まず、サンプル数が少なかったことと、対象校が1校かつ対象者が女子の家庭に偏っていたことがあげられる。郵送回収法の場合、教室内での一斉実施や留め置き法に比べ回収率が少なく、回収されたサンプル自体に一定のバイアスが含まれる可能性がある。質問紙を配布した中学校も1校のみであったため調査校の持つ特殊性や女子を持つ家庭の養育傾向が

反映されていることが考えられ、結果の一般化について課題が残る。次に、本研究は横断法を採用しており一時点の親子認知の差異のみを取り上げている。親の受容性に対する子どもの認知は、親子関係の緊張性を反映し、青年期初期から中期にかけて低くなり後期にかけてまた高くなるといった発達の变化がみられるとの結果もある (Furman & Buhrmester, 1992)。したがって、Tein et al. (1994) において子どものほうが親よりも暖かい養育と見ていた理由は、サンプルが青年期初期の子ども中心だったからであり、本研究や Guion et al. (2009) の結果がその逆であったのは青年期中期のサンプルを扱っていたからかもしれない。

親子間の認知的バイアスは、測定誤差とは異なり不要のものとして捨て置けないだけの情報が含まれ、通常な親子関係の発達の变化あるいは子どもの問題や適応との関連性を知るうえで特別な意味があるという見方もある (Mounts, 2007; Tein et al., 1994)。本研究の意義は、近年学校現場で集めることが困難となっている (神林・片瀬, 2009) 親子データにより、自律性が尊重される青年期の子どもを持つ家庭において、統制的養育が行われているとの認識は平均的に親子とも低く、情緒的関係的養育は親子とも平均的に高いと認知しており、子どもは親に比べ統制を否定的に受け止め、自由にしてくれることを肯定的に解釈する傾向が強いことを示したことだ。親子は、2者関係の中でも異なる位置にいることから同じ行動も互いに異なった解釈を行う可能性がある (Pelegrina et al., 2003)。もし、親が認知する以上に否定的な統制を常に受け情緒的な支えを全く受け取っていないと子どもが認識するのであれば、子どもの心理社会的健康に影響が及ぶかもしれない。評定者間一致のレベルや方向性の程度と子どもの適応不適応の関連を調べることは今後の検討課題と考えられる。また、養育とは、行為者と被行為者という2者以上の間で発生する行動であると同時に対人認知や社会的認知的側面を持つ。親子報告のバイアス発生の特徴やメカニズムについて詳しく調べるためには、夫婦間、きょうだい間、あるいは第三者による観察と家族メンバーの報告など様々な対象者間で比較を行う研究が必要かもしれない。

(謝辞)

本研究の調査実施および執筆にあたり、研究助成金を頂きましたグローバル COE、翻訳を手伝って下さった皆様、問い合わせに応じて下さいました小嶋秀夫先生、Dr. Schludermann, E. H.、ご助言ご指導頂きましたお茶の水女子大学菅原ますみ先生、同三輪健二先生、ならびご協力頂きました中学校の先生方、生徒ご父兄の皆様に深く感謝申し上げます。

(文献)

Barber, B. K. (1992). Family, personality, and adolescent problem behaviors. *Journal of Marriage and the Family*, 54, 69-79.

- Callan, V. J., & Noller, P. (1986). Perceptions of communicative relationships in families with adolescents. *Journal of Marriage and the Family*, 48, 813-820.
- Caster, J. B., Inderbitzen, H. M., & Hope, D. (1999). Relationship between youth and parent perceptions of family environment and social anxiety. *Journal of Anxiety Disorders*, 13, 237-251.
- Collins, W. A. (1991). Shared views and parent-adolescent relationships. *New Directions for Child and Adolescent Development*, 51, 103-110.
- De Los Reyes, A., & Kazdin, A. E. (2005). Informant discrepancies in the assessment of childhood psychopathology: A critical review, theoretical framework, and recommendations for further study. *Psychological Bulletin*, 131, 483-509.
- Furman, W., & Buhrmester, D. (1992). Age and sex differences in perceptions of networks of personal relationships. *Child Development*, 63, 103-115.
- Guion, K., Mrug, S., & Windle, M. (2009). Predictive value of informant discrepancies in reports of parenting: Relations to early adolescents' adjustment. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 37, 17-30.
- Hartley, A. G., Zakriski, A. L., & Wright, J. C. (2011). Probing the depths of informant discrepancies: Contextual influences on divergence and convergence. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, 40, 54-66.
- Juniper, E., O'Byrne, P., Guyatt, G., Ferrie, P., & King, D. (1999). Development and validation of a questionnaire to measure asthma control. *European Respiratory Journal*, 14, 902-907.
- 神林博史・片瀬一男 (2009). 親子調査における親欠票の原因。社会と調査, 2, 20-27.
- Kawash, G. F., & Clewes, J. L. (1988). A factor analysis of a short form of the CRPBI: are children's perceptions of control and discipline multidimensional? *The Journal of Psychology*, 122, 57-67.
- Kojima, H. (1975). Inter-battery factor analysis of parents' and children's reports of parental behavior. *Japanese Psychological Research*, 17, 33-48.
- 小嶋秀夫 (1969). 親の行動の質問用紙の項目水準におけるバッテリー間因子分析。金沢大学教育学部紀要。人文科学・社会科学・教育科学編, 18, 55-70.
- Lewis, C. C. (1981). The effects of parental firm control: A reinterpretation of findings. *Psychological Bulletin*, 90, 547-563.
- Maccoby, E. E., & Martin, J. A. (1983). Socialization in the context of the family: Parent-child interaction. In E. M. Hetherington (Ed.), *Handbook of child psychology* (Vol. 4, pp. 1-101).
- McClure, E., Brennan, P., Hammen, C., & Le Brocque, R. (2001). Parental anxiety disorders, child anxiety disorders, and the perceived parent-child relationship in an Australian high-risk sample. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 29, 1-10.
- McGillicuddy, N. B., Rychtarik, R. G., Morsheimer, E. T., & Burke-Storer, M. R. (2007). Agreement between parent and adolescent reports of adolescent substance use. *Journal of Child and Adolescent Substance Abuse*, 16, 59-78.
- Mounts, N. S. (2007). Adolescents' and their mothers' perceptions of parental management of peer relationships. *Journal of*

- Research on Adolescence*, 17, 169-178.
- Noller, P., Seth-Smith, M., Bouma, R., & Schweitzer, R. (1992). Parent and adolescent perceptions of family functioning: A comparison of clinic and non-clinic families. *Journal of Adolescence*, 15, 101-114.
- Paulson, S. E., & Sputa, C. L. (1996). Patterns of parenting during adolescence: Perceptions of adolescents and parents. *Adolescence*, 31, 369-381.
- Pelegriña, S., Garcí'a-Linares, M. C., & Casanova, P. F. (2003). Adolescents and their parents' perceptions about parenting characteristics. Who can better predict the adolescent's academic competence? *Journal of Adolescence*, 26, 651-665.
- Pettit, G. S., Laird, R. D., Dodge, K. A., Bates, J. E., & Criss, M. M. (2001). Antecedents and behavior-problem outcomes of parental monitoring and psychological control in early adolescence. *Child Development*, 72, 583-598.
- Rohner, R. P., Khaleque, A., & Cournoyer, D. E. (2005). Parental acceptance-rejection: Theory, methods, cross-cultural evidence, and implications. *Ethos*, 33, 299-334.
- Schaefer, E. S. (1965). Children's reports of parental behavior: An inventory. *Child Development*, 36, 413-424.
- Schludermann, E., & Schludermann, S. (1988). Children's report on parent behavior (CRPBI-108, CRPBI-30) for older children and adolescents: Technical report. Winnipeg, MB, Canada: University of Manitoba, Department of Psychology.
- Schwarz, J. C., Barton-Henry, M. L., & Pruzinsky, T. (1985). Assessing child-rearing behaviors: A comparison of ratings made by mother, father, child, and sibling on the CRPBI. *Child Development*, 56, 462-479.
- Steinberg, L., & Silk, J. S. (2002). Parenting adolescents. In M. H. Bornstein (Ed.), *Handbook of parenting: Vol. 1: Children and parenting (2nd ed.)*. (pp. 103-133): Mahwah, NJ, US: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- Stice, E., & Barrera, M. (1995). A longitudinal examination of the reciprocal relations between perceived parenting and adolescents' substance use and externalizing behaviors. *Developmental Psychology*, 31, 322-334.
- 鈴木眞雄・松田惺・永田忠夫・植村勝彦 (1985). 子どものパーソナリティ発達に影響を及ぼす養育態度・家族環境・社会的ストレスに関する測定尺度構成. 愛知教育大学研究報告. 教育科学, 34, 139-152.
- Tein, J.-Y., Roosa, M. W., & Michaels, M. (1994). Agreement between parent and child reports on parental behaviors. *Journal of Marriage and the Family*, 56, 341-355.
- Waters, E., Stewart-Brown, S., & Fitzpatrick, R. (2003). Agreement between adolescent self-report and parent reports of health and well-being: Results of an epidemiological study. *Child: Care, Health and Development*, 29, 501-509.
- Wu, C., & Chao, R. K. (2005). Intergenerational cultural conflicts in norms of parental warmth among Chinese American immigrants. *International Journal of Behavioral Development*, 29, 516-523.

(附録) CRPBI-108 尺度項目

注：A/R は CRPBI-30 における受容 - 拒否尺度 10 項目、FC/LC は確たる統制 - 緩い統制尺度 10 項目、PC/AC は心理的統制 - 心理的自律尺度 10 項目を示す。*CRPBI-30 での逆転項目を示す。

1. 受容 (Acceptance)
 - ・わたしの心配ごとを聞いてくれるので、わたしの気持が楽になる (A/R)
 - ・たいてい、あたたかい親しみのある調子で、わたしに話しかける
 - ・わたしにたびたびほほえみかける (A/R)
 - ・わたしの心が動ようしているときは、しずめてくれる (A/R)
 - ・わたしといっしょにものごとをするのがすきだ (A/R)
 - ・わたしが悲しんでいるときには、げんきづけてくれる (A/R)
 - ・わたしのした良いことの話をつたべする
 - ・わたしがしたことを、ほこりに思っているようだ
2. 子ども中心 (Childcenteredness)
 - ・わたしが喜ぶようなことを、いつも考えている
 - ・わたしのことに、じゅうぶん気をくばっている (A/R)
 - ・親にとって、わたしがいちばんたいせつだという感じをうける (A/R)
 - ・親の生活の全部は、子どもを中心にしたものである
 - ・親は自由な時間があれば、たいてい子どもとすごす
3. 肯定的関与 (Positive involvement)
 - ・わたしのことをたいへん愛しているという
 - ・わたしをほんとうに愛していることを態度で表わそうとする (A/R)
 - ・いつもわたしの考えや意見を聞いてくれる
 - ・よくわたしをほめる (A/R)
 - ・わたしが学校や遊びから帰ってくると、ことばをかけてくれる
 - ・わたしが小さいころ、寝る前にはだきしめたりキスをしてくれたりした
 - ・わたしが学校で勉強していることに、たいへん興味をもっている
 - ・わたしという子どもがいるから、自分はしあわせだという
4. 個体化の受容 (Acceptance of individuation)
 - ・親の考えより、わたしの考えのほうがよいとわたしが思えば、そのことをいわせてくれる
 - ・わたしがものをするのに、わたしの好きなやりかたでするのをよいと考えている
 - ・親のとりあつかいが気に入らないときは、それをいうように望んでいる
 - ・わたしといっしょにしている仕事のやり方を決める場合は、わたしも参加させてくれる
 - ・わたしがなんでも感じたままを親にいうように望んでいる
 - ・わたしのもののみかたを理解しようとする
 - ・なにをするか決めるとき、できるだけわたしに選ばせてくれる
 - ・話しやすい (A/R)
5. 所有 (Possessiveness)
 - ・わたしがいないと、わたしのことを心配する
 - ・わたしの生活につよく入りこんでくる
 - ・うちにいるときには、わたしにいちばん注意を向けている
 - ・親がついていないと自分のこともちゃんとできないのではない

- いかと、わたしのことを心配する
- ・親の目がとどくように、わたしがうちにいることを望んでいる
- 6. 敵意的無関心 (Hostile detachment)
 - ・わたしとあまり話をしない
 - ・わたしといっしょに過ごす時間は、ほんとうに少ない
 - ・わたしのことを考えてくれることは、あまりないようだ
 - ・わたしを愛しているというようすを表さない
 - ・わたしといっしょに、いろんな活動をするのではない
 - ・わたしのことを、いらいらさせる子どもだともんくをいう
 - ・いつもわたしのあらさがしをしている
 - ・わたしのことを、こんな子どもでなかったらよかったのに、と思っている
- 7. 拒否 (Rejection)
 - ・わたしに対して、あまり思いやりのない
 - ・わたしが助けてほしいときに、助けるのをわすれている
 - ・いつもわたしをせめたてる
 - ・たいてい、わたしがしたことにもんくをいっている
 - ・わたしがちょっとしたことをしても、ふきげんになり、はらをたてる
 - ・わたしといっしょに仕事をするのではない
 - ・わたしがほしがっているものを知らないようだ
 - ・わたしは愛されていないのだという感じをうける
- 8. コントロール (Control)
 - ・してもよいことといけないことを、わたしがちゃんと知っているように親は気をつけている
 - ・きまりをたくさんつくり、それをやかましくいわなければいけないと思っている (FC/LC)
 - ・わたしのした悪いことは、みななにかのかたちで、ばっしななければいけないと思っている
 - ・いいつけどおりにしなさいといいはる (FC/LC)
 - ・わたしの仕事がちやんと決まっっていて、それがすまないとはかのことをさせてくれない
- 9. 執行 (Enforcement)
 - ・わたしにたいして、たいへんきびしい (FC/LC)
 - ・きまりにこだわって、いろいろな例外をみとめてくれない
 - ・きついばつをあたえる (FC/LC)
 - ・わたしになにかいいつけたときは、それをわたしが守るかどうかに気をつけている
 - ・わたしが覚えきれないほどのきまりをつくる
- 10. 不執行 (Nonenforcement)
 - ・わたしがよくない行ないをしても、ふつうは気がつかない
 - ・わたしがよくない行ないをしても、あまり気にかけない
 - ・いいつけられたことを、わたしがちゃんとしたかどうかをたしかめない
 - ・わたしになにかせよと強くいうことは、めったにない
 - ・きまりを守らせるために口やかましくいったりすることはない
- 11. 緩いつけ (Lax discipline)
 - ・わたしのいいなりになる (FC/LC)*
 - ・わたしがなにか悪いことをしても、軽いばつだけで許す (FC/LC)*
 - ・わたしの悪い行ないをあまりとがめない
 - ・いいつけに対してわたしがもんくをいうと、むりには守らせない
- ・親をときふせて、わたしの考えどおりにさせやすい
- 12. 極端な自律 (Extreme autonomy)
 - ・わたしが出かけるときに、なん時に帰ってきなさいというようなことはない
 - ・わたしが望むままの自由をあたえてくれる (FC/LC)*
 - ・わたしの行きたいところへ、なにもきかないで行かせてくれる (FC/LC)*
 - ・夜でも、わたしが行きたいときは、いつでも外出させてくれる (FC/LC)*
 - ・したいことはなんでもさせてくれる (FC/LC)*
- 13. 侵入性 (Intrusiveness)
 - ・わたしがどこでなにをしているかを、ちゃんと知りたがっている
 - ・わたしが学校や遊びでなにをしていたかを、いつも知ろうとする
 - ・外でのできごとを、なんでも話しなさいという
 - ・わたしが良い友だちとつきあっているかを確かめるために、注意ぶかくしらべる
 - ・わたしが外でなにをしていたかを、ほかの人にたずねる
- 14. 罪悪感によるコントロール (Control through guilt)
 - ・わたしが親のすすめたとおりにしないと、気を悪くする
 - ・わたしのしたことで気を悪くする
 - ・親を愛しているのなら、親が望んでいるとおりにしなければいけないという
 - ・わたしのためにしてきたことを、なにからなにまできかせる (PC/PA)
 - ・ほんとうに親のことを思っているなら、親を困らせるようなことはできないはずだと言う (PC/PA)
- 15. 敵意的コントロール (Hostile control)
 - ・わたしがどんなふうに行動したらよいかを、いつもいいきかせる (PC/PA)
 - ・わたしの仕事をどんなふうにしたらよいかを、きちんといいきかせる
 - ・わたしのしたまちがいを、すぐにはわすれない
 - ・どんなときでも、わたしがすることをさしずしたがる (PC/PA)
 - ・わたしがうちのことで手伝いをしないと、かっとなる
 - ・わたしのすることは、なんでも親の考えどおりにさせようとする (PC/PA)
 - ・いつでもわたしの行儀やせいしつを変えていこうとする (PC/PA)
 - ・うちのわたしの行動がすきでない
- 16. 一貫性に欠けたしつけ (Inconsistent discipline)
 - ・親は、自分でつくったきまりをすぐ忘れてしまう
 - ・わたしが同じことをしても、あるときははしかり、あるときはほうっておく
 - ・そのときの気持ちしだいで、きまりを押しとおしたり、ゆるめたりする
 - ・親は自分につごうのよいときだけ、きまりを守る (PC/PA)
 - ・自分につごうがよくなるように、考えをかえる
- 17. 不安の吹き込み (Instilling persistent anxiety)
 - ・わたしが約そくをやぶると、ながいあいだわたしを信用しなくなる
 - ・わたしが自分のした悪い行ないのため、いつかはばつをうけるだろうという

- ・ わたしが悪いことをすると、ずっとあとになってからも、そのことを考えたり話したりする
 - ・ 悪い行ないは、どんなことでもたいへん重大なことで、あとで困ったことになると考えている
 - ・ わたしのした悪いことについて、くり返しくり返しわたしに話す
18. 関係性の撤退 (Withdrawal of relations)
- ・ 気にさわるようなことをわたしがすると、わたしに話しかけようとしなくなる
 - ・ わたしにたいして不満があると、しばらくは口もきかないで、冷たくなり、よそよそしくしている
 - ・ わたしが親とちがったもののみかたをすると、あいそが悪くなる (PC/PA)
 - ・ わたしが親の期待にそむくと、わたしを見ないようにする (PC/PA)
 - ・ 親の気持ちを悪くさせると、また親をよろこばせるまでは、わたしに話しかけなくなる (PC/PA)

Shared and Unshared Views between Parent and Child on Parental Behaviors during Adolescence

Shoka UTSUMI

(Human Developmental Sciences)

Research demonstrated discrepancies frequently exist among reports of family members with regard to parental behavior during adolescence. The current study examined 1) parent-adolescent informant agreement in the assessment of parental behaviors and 2) factor structure between parents' and adolescents' perceptions toward paternal and maternal parenting. Junior high school children (seventh, eighth and ninth graders, $n = 111$), their mothers ($n = 107$), and fathers ($n = 86$) completed a survey of Children's Report on Parent Behavior Inventory (CRPBI). The data gathered from mother-child and father-child dyads unveiled that internal reliabilities of parental behaviors were moderate for parents' reports and adequately high for adolescents' reports. Intraclass Correlations Coefficients (ICCs) for maternal parenting were moderate between parents and children; however, ICCs for paternal parenting were low with a few exceptions. Overall, both mothers and fathers described themselves as having higher levels of positive and controlling parenting behaviors than did their children. Confirmatory factor analyses were used to compare two different models of parenting behaviors (three factors and four factors), and to investigate the invariance of the factor structure between parents and children. The results indicated that a four-factor model with acceptance, psychological control, firm control, and lax control provided a better fit to the data. Adolescents perceived that parental firm control and psychological control were more similar and more negatively correlated with parental acceptance than assumed by their parents. Both parents and adolescents found parental lax control and parental acceptance were positively correlated. Parents differentiated parental behaviors more clearly compared with adolescents. Results suggested that discrepancies in parent-child reports are important to explain the differences in generational or developmental perspectives concerning parenting beyond mere measurement errors.

Keywords: parenting, adolescent, informant agreement, psychological control, behavioral control